

外国人教授に対する日本語学習の支援

徳 永 光 展

1. 問題の所在

本稿では、日本在住の成人に対する日本語教育の一実践を記録する。筆者は2001年4月より5年間にわたって、宮崎国際大学に日本語担当として勤務した。学生はほとんどが日本人であったが、外国人教師から英語で教育を受け、16週間の海外研修も経験し、グローバルな視野を体得していった⁽¹⁾。教職課程履修者に対する教職科目を除くと、唯一日本語で開講する授業として設定されていたのが「日本語表現」という科目だった。この科目担当者として英語圏から来日した外国人教授に混じって仕事をしたのである。

教授陣は学生に対してすべて英語で指導するというのが大学の方針だった。だから、日本語の知識は不問とされていた。大学内は英語での生活で事足りたが、そこで過ごす教授陣は一步外に出ると、純日本社会の中で生活しなければならず、その環境にどうやって適応いくかは重要な案件であった⁽²⁾。

着任してしばらく経った頃、あるアメリカ人教師が、「英語圏からやってきた我々に日本語を教えてくれるサービスが大学にあってよいのではないか」と言い出したのが発端となって、教授陣向けに日本語のサポートをする可能性が考慮されるようになった。その結果として、2002年の春学期に筆者が教授陣向け日本語授業を開講することとなったのである⁽³⁾。そのような試みは以前にもあったそうだが、通年で授業が成立したケースはなかったとのことであった。途中で棄権するものが出て、気にしないようにとの説明も管理職からあったが、大きな目標はクラスを何とか通年で維持存続させることに置かれたのである。

とはいっても、外国人教授の日本語に対する知識は全くばらばらであった。ゼロ初級から日本語で本を読むレベルまで様々であり、挨拶言葉をやっと言えるだけの方から自由に会話ができ、電話だったら相手が日本人と間違えてしまうのではないかとということまで習得が進んでいる方もあった。配偶者が日本人で家庭内での会話が日本語という方、家族と共に来日したために地域の幼稚園や小学校に子供が通い、その言語習得に何とかついていきたいと考える方、日本語を新たな研究言語にしたいと考える方、生活に必要な最低限の言葉だけでも何とかしたいと考える方など、日本語学習動機も一括りにはできなかった。そのように異なった動機付けを持った集団に対して、一体どのような授業を提供するのがよいのか、暗中模索することとなった。

その結果、2002年度はゼロ初級者向け、2003年度は中級者向けにそれぞれ週1回90分の授業を行った。参加者は5～8名で推移した。ここでは、当時の記録を再現してみたい。

2. 初級

様々な要求があることを承知の上で、まずは初級、それも全く日本語を知らないゼロ初級者

向けの教室を運営した。目標は控えめにし、サバイバル・ジャパニーズに触れることに設定した⁽⁴⁾。また、文字学習は含まず、すべてローマ字表記により指導した。

習熟度に差が出るので、どうしても全員が習得すべき内容と可能ならば習得したい内容を明確に分けて参加者に意識させる配慮は必要であった。習熟の早い学習者には自由会話で自信を持たせ、遅い学習者には基本句型⁽⁵⁾、基本語彙の練習のみで十分であることを告げ、理解できない内容が授業に存在しても気にしないようにとも告げた。

教室では、日本語で授業を行った。英語母語話者対象ではあったが、韓国人の教授も参加したし、韓国からの交換留学生の参加もあった。カナダのケベック州出身で第一言語がフランス語、第二言語が英語という方もいた。だから、授業者が中途半端に英語を使うと、かえって問題が生じかねなかった。使用教材は、吉田弥寿夫『日本語入門』(学研 1985年12月)⁽⁶⁾である。1つの課を1回の授業で扱った。英語話者を想定して開発されたこの教科書に記載の英語による説明を各自で熟読してもらい、授業者は日本語で例をできるかぎり挙げるようにした。また、参加者に知っている日本語をとにかく使ってもらい、必要最低限の日本語の訂正を挿入するというスタイルを取った。

知っている日本語を話してみても、通じると嬉しそうにする受講生の様子はありありと分かった。そこで、毎週参加者に短くてもいいので、何か思いついた日本語を話してもらおうようにした。すると、それに対して質問する他の参加者が出てきたりして、会話が弾むようにもなった。会話には、学習者の関心や産出可能な情報が詰まっている。飽くまでも、教科書「を」教えるのではなく、教科書「で」教えるという姿勢に立つ必要があった。教科書が提示する練習問題は押さえるべきだが、それを基にして自由に会話が進展するような形を考えるのが望ましい。各受講者の言語文化的コンテクストにいかにして授業者が入り込み、彼らの理解の枠組に切り込んでいくかが問われている。授業者と受講者、また受講者相互間における比較言語・比較文化の激突こそが教室の現場であり、異文化コミュニケーションが参加者間で常に生成されていった⁽⁷⁾。

韓国の学生にとっては、普段指導を受けている先生方に混じって初級日本語のレッスンを受けるのはプレッシャーだったようであるが、教授陣の別の姿を垣間見る貴重な機会をも提供することとなった。

3. 中級

その次には、水谷信子『総合日本語 初級から中級へ』(凡人社 1995年1月)⁽⁸⁾を使用することにした。教科書はルビ付きの漢字仮名混じり文で書かれ、英訳が付されたものである。内容は「本文」「会話」(比較的丁寧な会話文Ⅰとくだけた会話文Ⅱ)「単語のまとめ」「文法ノート」「文型練習」「ディスコース練習」「漢字熟語練習」「応用読解練習」で構成される。「本文」や「会話」に後の文法・文型・ディスコースにて説明される項目が含まれている。

相応しい教材の発掘には労多く、この教科書が次の段階に進む学習者にとって最適だったかどうかには議論があろう。事実、初級履修者のうちで、中級は履修しなかった方があり、逆にこの中級教科書を使うようにしたから、参加するようになった方もあったのである。

サバイバル・ジャパニーズを終了した学習者のレベルを「入門終了」「初級終了」と考える

ならば、入門の教科書をどうにか終えた段階を基準に考えるべきである。しかし、これを中級と見るなら、更に高い段階が想定されよう。そこに以前初級を履修した経験があるものの、その後ブランクを経て、再度学習しようとしている学習者が混じった場合、相当の努力を強いられるということなのである。

すると、努力を重ねて何とかついてくる形で初級段階を履修した方のうち若干名がそれ以降の履修を断念したのはこの展開を見る限り、やむを得ないというより他にない。初級の補完というレベルを設定し、相当程度の復習を織り込みながら、ゆっくりとしたケアをする必要のある段階というものがあつたのである。もし、それを第一においた授業を構築するなら中級以上を目指す学習者は参加しないだろう。

しかし、この授業が初級補完という形になり得ず、どちらかといえば中級として発足せざるを得なかったのには理由がある。つまり、初級修了後の学習者を想定したテキストをうまく見出せなかったのである。

ひらがなは参加者全員が読めることが確認できた。しかし、パソコン入力できればよいと言い切る方もあつた。一見すると極論のようにも映るが、では日本人がアラビア文字の手書きを習得できるようになる水準までをアラビア語学習において目指すかとなると、判断に迷うのと同じである。

まず、ひらがなが書けるかどうかを試してみると、何とか可能という状態であつた。カタカナには無理があつたが、自分の名前は知っていた方がよいので、それだけは覚えさせるようにした⁽⁹⁾。日本語にはない発音が英語や韓国語にはたくさんあり、それを五十音で無理に表記せねばならない必要から日本人の話す英語には音声上の変化が生じがちな状況に気づいてもらつた。

読めることと、書けることが別なのは明白であつた。『総合日本語 初級から中級へ』は漢字かな混じりで書かれている。漢字の書き方は教えないまま進むことにしたものの、これまでローマ字で行っていた板書は教科書変更に伴いかな表記することにした。

授業は、受講者の能力に応じて自由な会話を試みさせ、必要な訂正を施していく場面と、教科書を使って文法や語彙の説明を織り込みながら進行する場面とで構成していった。自由会話になると、その英訳を授業者か、または参加者の誰かが言い、日本語・英語・韓国語、一対一対応で連想し、メモを書き留めることで理解を促していく。ともすれば先走る学習者が暴走して他の参加者が煙に巻かれるという危険性も孕んでいたが、逆にそのような学習者が自己理解した内容を日英二ヶ国語で他の参加者にうまく説明する協調性を発揮した場合には、和やかな雰囲気醸し出された。自由会話を大幅に取り入れるのは、既に中級に達しつつある学習者の関心、ひいては人格を尊重することを意味した。

もう1つの部分は教科書に沿って進める時間だが、これは更に教科書音読の場面と練習問題に取り組む場面に分かれる。ひらがなを読めるようにゆっくりとした範読をするが、これは参加者全員問題なくついてくることができるように思われる。教科書すべての部分（本文・文法解説、練習問題、語彙）に英訳が付されているので英語母語話者には問題ないのだが、韓国語が母語の学生は二段階の翻訳を経ねばならず、意味の理解に時間を要した。中級になると、ブラジルから来日した日系人学生の参加もあつた。彼らは発話能力にも長け、十分に参加するこ

とができた。

使用教科書はトピック毎に課が形成されており、第1課から第15課へ向けて段階的に難度が上がるという性質のものではない。授業の難易度は、その日の参加者の発話状況によって異なってくる。授業者は、その場で瞬時に状況を判断し、的確な判断を行う責任を負っていると云えるのである。

4. 課題

レベルの違いは当初からあるが、その上で差が開いてきた場合にはどう対処すべきか。スタートのレベルを揃えることはできないし、習得力の程度もまちまちであるが、どこから始めてどこで終るか、という問題は常に課題であり続けた。

スタートはサバイバル・ジャパニーズだからという論理で始めからということができる。しかし、少人数制のクラスで参加者の中に高い目標を持っている者が含まれていた場合、その参加者がクラス全体の士気に影響を与えることは避けられない。また、日本語を習いたいとは思っていてもレベルが低いので参加しないという方もいる。仮に途中からレベルの高い参加者が参入してきた場合にどう対処するのがよいかという問題も発生する。

加えて、自己主張の激しい参加者が全体のバランスを考えずにクラスの雰囲気や左右しがちな状況には常に配慮が必要だったが、その一方で熱心だが遠慮がちな参加者を脱落させないで引っ張る心遣いも求められた。クラス全体の状況や講師の心遣いに配慮がなく、主張しようとする受講生があった事実も否定できず、それが緩やかなレベルの低い受講者の士気に影響を与えていたのではないかという思いは否定できない。交通整理のように参加者それぞれのモチベーションを引き出す技量がこちらの指導力そのものなのではあるが、大変難しかったことは告白しておかなければなるまい。

入門・初級レベル終了の学習者にその後持たせる教科書として何がよいかという問題もあった。かなり調べはしたものの、ゼロ初級用教科書を終えた段階の学習者が次に手に取るのに相応しい教材の発掘が大きな問題であり、ゼロ初級と中級との間に断層が存在する様子が見えてきたのである。

成人という括りは大雑把である。やはり、30代と50代では上達の速度が違う。言語習得の世界には臨界期がいつ来るか¹⁰⁾、また言語学習における能力の化石化(上達のストップ)がどの段階で起きるかという問題は古くて新しい問題であるが、若い学習者の方が柔軟である様子は見取れた。一方、年配の学習者に寄り添う気遣いをどのように見せるかは授業者の人間性に関わる問題だと感じさせられた。

5. 結語

英語圏出身の成人学習者を対象としたこの日本語指導実践の特徴をまとめておきたい。

まず、一般論として、初級や中級といった段階では、語学的・教授法的に教えることが可能な項目、難し過ぎる項目、優し過ぎる項目それぞれを授業者が自覚しておく必要がある¹¹⁾。小学校教員が各学年で教えるべき漢字を把握し、中学校や高等学校の英語教員が各学年で学ぶべき英単語や文法を理解しているのと同じように、日本語の語彙や文法項目に対する意識を日本

語教育担当者は持っているべきであろう。そのためには初級・中級各段階における教科書分析や日本語能力試験の各級がどのようなレベルと出題傾向を持っているかを把握する必要もある。また、言語文化的観点に立って見た場合、ある言語使用者にとっては理解が容易な発音、語彙、また文法項目が他の言語使用者にとっては著しく理解困難なケースも多々発生する。よって、比較言語文化的な基礎素養を獲得することは日本語教育従事者にとって不可欠である。加えて、成人学習者の面子を潰さず、受容的な雰囲気を作り出せる配慮も欠かせない。

続いて、ここでの経験に特化して述べる。参加者は教職にあり、人文社会科学の諸分野で修士号乃至博士号を取得していた。また、日本という異国の地に暮らしながら、英語を使って日本人学生を教え導く立場にあるという意味において、熟達した言語教育の専門家からなる集団だった。また当時、ほとんどが授業者である私より年上でもあった。英語教育について深い造詣を持った方々を前にして、授業をするこちら側が毎週試されていたと言ってよい。けれども、授業に集ってきた方々が何を欲しているかを常に想像しながら、受容的なクラスづくりに心を砕いていく中で、お互いの緊張も和らぎ、和やかな雰囲気を醸し出せるようになっていった。受講者は言語習得の難しさを熟知しており、また教える側の立場にも思いを巡らせられるだけの教養を持った方々であった。その意味では精神的に成熟した大人であった。英語と日本語が全く異なる言語であり、双方を解するようになるには大変な努力を必要とする状況も分かちておられた。

この教室における授業者と受講者の関係は複雑である。相手は同僚であり、学位・職位・年齢ともに授業者に勝る者で占められていたのである。単位制度の下で学生を縛るものでもない。授業者は権威で受講者を抑えるわけではなく、また相手の顔色に配慮する必要もあった。受講者を否定することは絶対に許されない。授業者にとっては正規の仕事の1つではあるが、同時に奉仕の要素を多分に持った活動でもあった。

参加者一人ひとりが異なる性質の動機付けを抱いていたが、それら全部の要求を叶えることは難しい。制約のある中での実践でしかないものの、ここでの実践はゼロ初級と中級それぞれの段階にあった参加者の知的好奇心にある程度は応えていたのではないかと思われる。日本国内における英語圏から来日した成人を中心とするクラスの様子的一端を報告することを通して、関係各位の参考に供することができれば幸いである。

【注】

- (1) 徳永光展「日本人学生を対象とした英語集中習得課程——宮崎国際大学における実践内容とその有効性をめぐって——」、「比較思想論輯」第13号（比較思想学会福岡支部 2007年9月）
- (2) 地方都市で生活するに際し、日本に関する理解力・想像力は必要であった。水谷修、佐々木瑞枝、細川英雄、池田裕編『日本事情ハンドブック』（大修館書店 1995年1月）は、外国人が意識する日本事情に関する情報を網羅的に記述している。
- (3) 社団法人日本語教育学会編『新版 日本語教育事典』（大修館書店 2005年10月）で述べられる日本語教育諸学への知見を授業者が獲得しつつ、試行錯誤する必要が生じた。
- (4) 浅倉美波、遠藤藍子、春原憲一郎、松本隆、山本京子『日本語教師必携 ハート&テク

ニック』(アルク 2000年10月)は「初級指導のポイント」を「動詞の基本活用」「形容詞の基本活用」「テ形攻略法」「願望や意志の表現」「自動詞・他動詞」「授受表現」「敬語」「受け身」「使役」「助詞」の10項目にまとめている(196-238頁)。

- (5) 文型に関しては、砂川有里子、駒田聡、下田美津子、鈴木睦、筒井佐代、蓮沼昭子、ベケシュ・アンドレイ、森本順子『日本語文型辞典』(くろしお出版 1998年2月)が外国人の日本語学習者を意識した記述となっており、活用に値する。また、牧野成一、筒井道雄『日本語基本文法辞典』(ジャパントイムズ 1989年3月)、牧野成一、筒井道雄『日本語文法辞典[中級編]』(ジャパントイムズ 1995年6月)、牧野成一、筒井道雄『日本語文法辞典[上級編]』(ジャパントイムズ 2008年4月)は文法項目に関する網羅的な記述を含んでおり、学習者から出されやすい疑問にも対応でき、参照しやすい内容となっている。
- (6) Yasuo Yoshida, *Japanese for Beginners: New Edition*, Gakken, 1985.
この教科書は、ゼロ初級の英語母語話者に対するサバイバル・ジャパニーズの習得を目標とする内容で構成されている。
- (7) 異文化コミュニケーションに対する寛容な態度を習得するに際しては、以下の文献が参考になる。古田暁監修、石井敏、岡部朗一、久米昭元『異文化コミュニケーション 改訂版』(有斐閣 1996年2月)、石井敏、久米昭元、遠山淳、平井一弘、松本茂、御堂岡潔編『異文化コミュニケーション・ハンドブック』(有斐閣 1997年1月)、鍋倉健悦『異文化間コミュニケーション入門』(丸善 1997年3月)、池田理知子、E.M.クレーマー『異文化コミュニケーション入門』(有斐閣 2000年9月)、石井敏、久米昭元、遠山淳『異文化コミュニケーションの理論』(有斐閣 2001年1月)、八代京子、荒木晶子、樋口容視子、山本志都、コミサロフ喜美『異文化コミュニケーション・ワークブック』(三修社 2001年9月)、古田暁、石井敏、岡部朗一、平井一弘、久米昭元『異文化コミュニケーションキーワード 新版』(有斐閣 2001年10月)、久米昭元、長谷川典子『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション 誤解・失敗・すれ違い』(有斐閣 2007年9月)、池田理知子編著『よくわかる異文化コミュニケーション』(ミネルヴァ書房 2010年2月)、石井敏、久米昭元、長谷川典子、桜木俊行、石黒武人『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション 多文化共生と平和構築に向けて』(有斐閣 2013年11月)。
- (8) Nobuko Mizutani, *Introduction to Intermediate Japanese*, Bonjinsha, 1995.
この教科書は、「住宅」「足のうら」「るすばん電話」「コーヒー」「地下生活」「企業内学校」「商品」「登校拒否」「宅配便」「カード時代」「ゴミ」「コピー食品」「在宅勤務」「サルと人間」「相性」の計15課で構成されている。
- (9) ひらがなとカタカナへの導入に際しては、財団法人海外技術者研修協会編『一人で学べる ひらがな かたかな』(スリーエーネットワーク 2000年6月)を参考にした。
- (10) 小柳かおる『日本語教師のための新しい言語習得概論』(スリーエーネットワーク 2004年10月 157-160頁)が言語習得における臨界期仮説に触れている。
- (11) 松岡弘監修、庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(スリーエーネットワーク 2000年5月)、白川博之監修、庵功雄、

(25)

高梨信乃、中西久美子、山田敏弘『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(スリーエーネットワーク 2001年10月)、市川保子『初級日本語文法と教え方のポイント』(スリーエーネットワーク 2005年4月)、市川保子『中級日本語文法と教え方のポイント』(スリーエーネットワーク 2007年7月)が初級から中級にかけての学習者に習得させるべき文法項目を網羅的に解説している。

(とくなが・みつひろ)